金沢商人の上越親鸞旧跡・信濃善光寺参詣記

鈴木　景二

一、はじめに

信州から上越を通り日本海へ続く道は、北陸の大名の参勤交代の道として知られる。しかしまた地域間を結ぶ重要な交通路でもあり、平安時代以来、畿内から善光寺へ参る道でもあった。また上越地域にはふるく越後国府がおかれ親鸞が配流されたところであり、それに因む旧跡を巡る二十四輩巡拝の舞台ともなった。そのため、武家の江戸往復の記録のほかに参詣記も残されている。ここではそうしたタイプの道中記を紹介する。

二、道中記の概要

当該史料は『善光寺参詣・祖師聖人御旧跡等其外道中附』。現在は、金沢市立玉川図書館近世史料館に所蔵されている（1）。

本史料を書き残したのは金沢城下の商人田上屋道助。犀川大橋の東側、商人町である河原町に、北国街道に面して店を構えていた足袋商である（2）。善光寺での高額の布施支出はその豊かさを裏付けている。旅の記録は、寛政十一年（一七九九）四月二十三日の金沢出発から書き起し、善光寺・柏崎などを廻り、五月十六日の富山二泊目の芝居見物で終わっている。金沢までの帰路は記録する必要もなかったのであろう。

旅の同行者は二人。一人は夫人で、善光寺が女人救済の霊場なので同行したと考えられる。いま一人の同行者は藤吉。子息か従者であろう。

道助らが寛政十一年春の時点で善光寺へ参詣したのは、この年が大掛かりな御開帳の年に当たっていたためと考えられる。これ以前、寛政六年（一七九四）に善光寺別当大勧進等順が、国家安全と五重塔再建費勧進を企図して、西国での回国開帳を開始した。富山や金沢、福井でも開帳が行われたので、道助も金沢で尊像を拝し善光寺参詣を発意したのであろう。遠く鹿児島にまで及んだ回国開帳の如来像は同十年秋に帰着している。そして翌十一年（未年）三月から二か月、善光寺で御開帳が行われた（3）。道助らが参詣したのはまさにこの頃である。彼の多額の寄付の内訳に、五重塔建立のため五重目柱一本の寄進料一両が見られるのは、等順の塔建立勧進に応じたのである。善光寺如来は親鸞も信仰し浄土真宗に受容されていたから、出開帳は真宗の門徒の多い北陸にも大きな影響を与えたであろう。この旅の記録は、等順の回国開帳による善光寺信仰高揚の産物であった。

この史料は、記録者の性格かあるいは商人としての習いか、記述が具体的であるのに加え、「金沢より泊り付并料理付控」として別項目をたてて宿泊賃や献立を記録している。また、浄土真宗の信仰に篤い人であったらしく、善光寺だけでなく、親鸞ゆかりの旧跡へも足を延ばしていることなど、興味深い記述がみられる。

途上に関しては、架け替え中の愛本橋の替りの綱を掛けての渡し船、親不知の難所通過、そのほか信越国境付近の情景描写がいきいきとしており、スケッチを含む点も注目される。親不知の少し先（東側）にある落水（おちりみず）の瀧は鶴の瀧とも呼ばれた。その傍らに「北国鶴の茶屋」

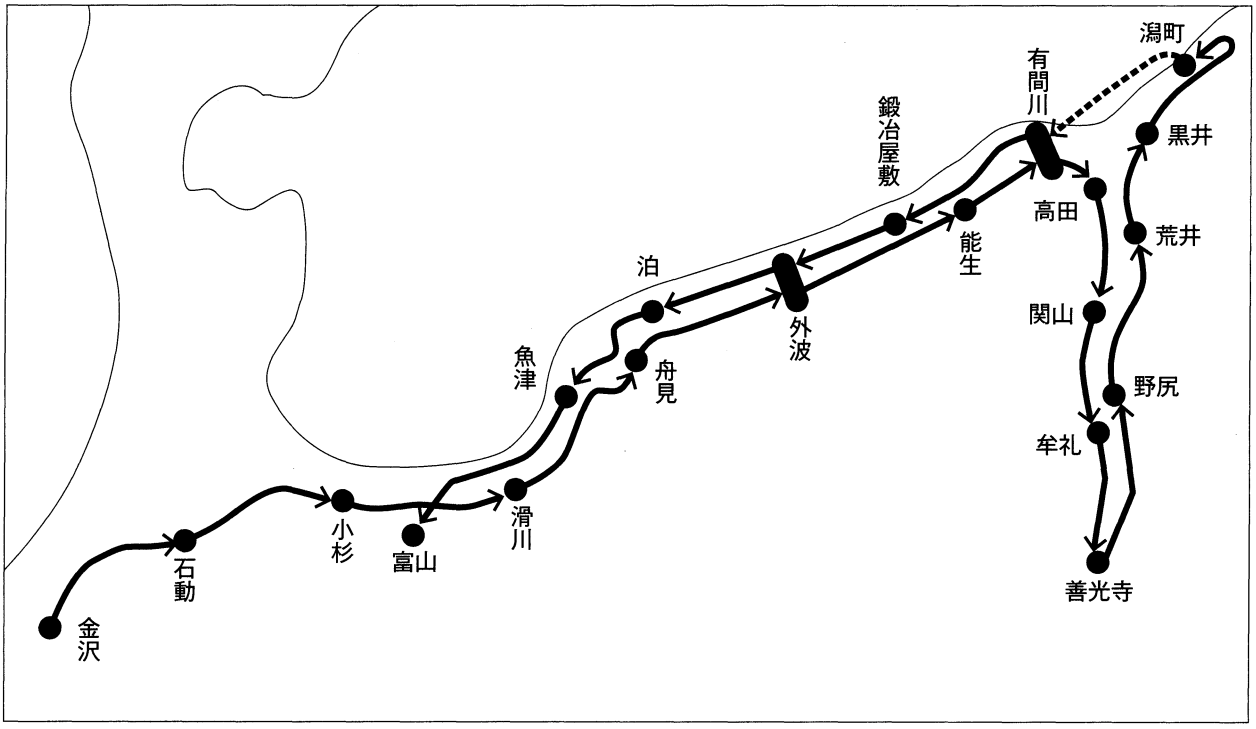
があったという記述も珍しい。東海道吉原宿の西にも鶴の茶屋があったから、当地の「おちる」を「おつる」と読み替えて、それに擬えたのであろうか。

交通システム関係では、宿屋の機能が窺われる。泊宿ではその先の市振の桔梗屋から通達が来て、寄ると茶を出し色々話した。牟礼宿加賀屋六左衛門には、善光寺奉納のため事前におそらく飛脚便で送った金子・幡などを受取ってもらっている。加賀屋は加賀藩脇本陣で三度飛脚の宿でもあり、その機能が窺われる（4）。道助は金沢の商人であるから桔梗屋や加賀屋などと何らかの関係があったかもしれない。

五月一日、関山権現で江戸からきた日光山門主一行に出遇っており、『妙高山雲上寺宝蔵院日記』に該当する記事がある。二日、関山から先で街道を外れ関川を渡って東側を通っている、関川関所を迂回したのであろう。この区間の帰りの記録はないが、越中への帰路では親不知手前から山

〔行程一覧〕

寛政11年（1799）	宿泊所	1人分泊賃（単位：文）	
【4月】			
23日　金沢発			
23日　石動	問屋市郎兵衛	200	
24日　小杉	大所寺屋	170	
25日　滑川	氷見屋又兵衛	200	
26日　舟見	内島屋久右衛門	170	三度宿
27日　外波	問屋七郎右衛門	200	本陣
28日　能生	問屋源右衛門	200	
29日　有馬川	問屋近右衛門	200	
30日　高田	有沢屋六右衛門	150	
【5月】			
1日　関山	村越惣兵衛	200	
2日　牟礼	加賀屋六左衛門	200（脇本陣）	
3日　善光寺	善光寺宿坊善行坊	1日2朱（金払・3人分）	
～5日			
6日　野尻	加々屋伊右衛門	200	
7日　荒井	近江屋杢左衛門	200	
8日　黒井	漁師家	250（3人分・木賃）	
9日　潟町	扇屋	150	
10日　有間川	問屋近右衛門	200	
11日　梶屋敷	弥左衛門	200	
12日　外波	問屋七左衛門	1日2朱（金払・3人分）	
13日　泊	古江屋久左衛門	700（3人分）	
14日　魚津	問屋久兵衛	200	
15日　富山	清水屋権三郎		
～16日以後不記			



経路概略図（往復を区別するため同一街道を平行線で表示）

間に登り上路（あげろ）越えを通って市振関所を迂回した。当時の関所は女性の取り調べが厳しく、しばしば関所抜けや迂回をしている。夫人を伴う道助一行も、そのために迂回路を選んだのであろう。

善光寺では、他の霊場と同じく参詣者の地元によって宿坊が決められることになっており、金沢人の道助は善行坊を指定された。滞在中の見聞や寄進金品の記述は詳しく、多額の寄進を行ったことがわかる。十一人の位牌を二組作らせ本坊と宿坊の両方に立て、毎月の供養料を納めたほか、前述の通り五重塔建立への寄進もおこなった。なお、五重塔は幕府の許可がおりず建立されなかった。

宿屋・本陣の宿泊費、食事が知られる点も重要である。全体を見ると、沿海地では魚が出されているが、荒井、野尻でも焼魚が出されており、魚の流通の有様が想像される。滑川宿では船からあがったばかりの魚に、金沢の住人である道助でも舌鼓を打っている。冷蔵機器のなかった当時の魚の鮮度について考えさせる記述である。野尻宿では、飯代わりに当地の名物そばが振る舞われている。

いっぽう、道助は寄進・土産用に菓子を携えている。いたみにくく軽量の干菓子が用いられているが、唐覆盆子（からいちご）、御所落雁、金平糖などは金沢の菓子としての付加価値もあったのであろう。なお、江戸からの善光寺参詣道中記で献立や関所迂回のみられる記録として、天保十一年（一八四〇）の『善光寺紀行』（「江戸富裕人の善光寺・上州温泉紀行」『道が人をつなぐ―北国街道の四〇〇年―』二〇一一年　長野市立博物館）がある。

この史料からは、これ以外にも多くの事項を引き出すことができるであろう。本稿がその一助になれば幸甚である。

（1）「郷土史料」〇九〇―五二八。後補表紙見返しに「副田平治氏寄贈本」と記されている。なお、この史料は、二〇一一年秋に長野市立博物館で開かれた「道が人をつなぐ―北国街道の四〇〇年―」に展示され同展図録で概要が紹介された。

（2）金沢市立玉川図書館編『金沢町名帳』一九九六年、四五頁に、文化八年時点で川南町に「取質・足袋　田上屋道助」とある。また同編『金沢町絵図』一九九八年、四七八頁に、天保三年時点で川南町に「田上屋道助」と記されている。ただしミセケチで林屋与右衛門と訂正されているので後に退転したらしい。

（3）宮島潤子『信濃の聖と木食行者』角川書店、一九八三年

（4）鈴木「信州牟礼宿の富山藩本陣・加賀藩脇本陣の記録―加賀屋柳沢六左衛門家史料―」（『飯綱町の歴史と文化　いいづな歴史ふれあい館紀要』第三号　二〇一五年）参照。

三、史料翻刻文

『善光寺参詣・祖師聖人御旧跡等其外道中附』袋綴竪帳　十九丁
金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵　「郷土史料」〇九〇―五二八
寛政十一年（一七九九）四月二十三日（金沢）～五月十六日（富山）

・翻刻では組版の都合上、字配りを変更した部分がある。
・修補時の綴じ直しで喉の部分が開けず読めない文字がある。その不明文字および筆者に解読できなかった字句は□または〔　〕で示した。また字句解読が不確実なものには（カ）を付した。
・原文の振り仮名は〈　〉で、説明注は（　）で記入した。

【原表紙外題】

寛政十一年未四月

善光寺参詣
祖師聖人御旧跡　等其外道中附

加州金沢　田上屋道助

【本文】

未**四月廿三日**朝六つ時ニ立、大樋通御見おくり十人計有、○津幡中飯、○石動泊り八つ時、△問屋市郎兵衛殿方宿、払三人弐百文宛、○七つ時より雨ふる、

廿四日　七リ

石動より朝五つ過ニ立、一日雨ふり、高岡ずいりう（瑞龍）寺・はん（繁）久寺、夫より小杉へ七つ前ニ泊り、○宿大所（聖）寺屋、○三人払、トまり賃五百十文、

廿五日　七リ八丁

雨天、雨ハふり不申、七つ頃より天気、小杉より五つ過立、安祢ん（養）坊茶屋休ミ、餅等タベ、夫より富山出町見物仕り候て権三郎へヨリ、夫より富山より一リ八丁行、しん庄ノ末ごほん（五本榎）にて中飯、八つ前罷（カ）下ル、常願寺川ヲ一リ半計下り渡しニのり舟賃三人拾文、水橋へ出、夫よりなめり川へ廿五丁浜道（カ）、りやうし（漁師）町つゝきいたつてよき道也、なめり川、○ひミ屋又兵衛殿宿、よる大雨ふり、なめり川能キ町、三人賃六百文、能き料里也、

向　鯛さしミ
しる　あんこ
にもの　生いか
焼物　大たい
何も舟よりじきニ而ふうミよし、

宿ノ二間行橋有、橋より廿間計大海ニ而じき（直）にいきだい（生鯛）等せんとふ（船頭）上売ル也、はんしやう（繁盛）の所也、

廿六日

朝雨天ニ而雨ふり不申、五つ半時ニ立、但別組なめり川宿より舟見迄七里半、籠やとい切七百六十文ニ廿文酒手、此方三日市より浦山迄弐里、藤吉ノ荷付馬ニ乗ル、帰り馬ニ而弐里計五拾文ニ而のり、籠ノ者三日市より舟見へいく、三日市茶屋ニ而ふとんかり申、よき茶や也、茶屋ニ而肴ハ持参ニ而、茶代三十文遣し候へハ悦申也、

○滑川より壱り半計ニ而早つき川、山川ニ而じきニ渡りより一丁計波打きわけんそ（険阻）あら石ニ而すさまじき川也、用水ニ取り申ニ付、かち渡り三瀬もゝ（腿）切有、しかし女ハ渡りかたし、半道ニ而魚津、いたつて能き町、是も肴々しきに上り、はんしやう也、町長サ廿丁計、橋も五六丁も有ト見へ申也、入口ニ而籠立、○三日市へ弐リ山手へ上ル、尤くろべへ出ル時ハすく（直）道、相元（愛本）川満水ニ而上へ廻り小松原も有、道あし也、魚津より壱り計り上り山相ニ而河原幅弐丁計、○かたかい川、ふせ川弐瀬十丁計、川上にて山なり出、弐谷より水出かわらハ壱つ、瀬ハ弐つ也、何レもかり橋有、壱人ニ壱弐文、橋セんやル、三日市よき茶や也、三日市より浦山弐り、山道平道なん所也、石高也、浦山より相元上り下り少々有、道なん所也、相元橋ハ御ふしん（普請）ニ而古橋とれ、橋だい計しき而、其下タ舟渡し、渡し守り七人ニ而つな大まもの五筋計懸り有、のり舟ニ七人ニ而ふねよせ候所、一向舟しばしもたもちゑず、急々舟ニ入申事、岩ニ水当り高波立そのすさまじき事申計もなし、川上ニじき高山見へ雪満々たり、舟渡しノ所ふかき事あいノことくはやき事矢ノことく岩ニ水当、当ル音さもすさまじき也、舟より壱丁計下ノセニ而此所ハゝ壱丁計白波計也、石なかれ申也、夫より舟見へ半道、上ノ本道へハ不行、かわらより新道壱丁計坂付、夫より舟見へ行、但、舟見りやう大野へ用水切出ス、細工ちやうば有、船見へ七つ頃に付、○宿内島屋久右衛門殿、三度宿也、よき宿也、○三人とまりちん五百拾文、

【図1】

廿七日

図1　愛本橋と渡船と綱

朝五つ半頃ニ立、天気一日吉、舟見より一里半ニ而やないだ（柳田）ト申所、篭〈カゴ〉立場、但舟見より堺（境）町迄四リ半、籠〈カゴ〉ニ前組のる、かたかい村出口河原、此かわをゆ川・宇川か、山上ニ二十間ゆ出ル（小川温泉）、かち渡り、河原ハ、壱丁計、此川も水出ル所とまる、泊りしゆく（宿）、しゆくより七八丁出小坂有、よ（榎）の木一本有、其下ニ聖人御腰懸石有、さく（柵）ふり（＝めぐらす）有、泊りしゆくより一リ下り宮崎ト申しゆく有、此間海手へ高山なり出、その下を通、よきけい（景）なり、宮崎ニ御坊有、妙光寺ト申、此寺ニ有山なり出大石所へ聖人御一しゆく、其大石、此寺なり、やらい（矢来）ふり有、聖人御やとりの石ト申、堺町へ付ク、茶屋ニ而休ミ、至而はんしやう、夫より御関所へ御手判指上、無異儀通、御関所より壱丁計出、堺川有、越中越後ノ堺ニ而谷合より川出、川ハセまく候へともふかき事も、切、早き事矢のことくじきニ海也、此所川越人足下リハ堺より、上リハ市ふり人足也、三人弐百文ニ而越、三人ニ六人ニ而越、大さを（竿）ヲ横ニ仕、三人セをい（背負い）越、市ふり関所有、三人改通ル、市ふり宿ききやう屋仁右衛門、泊り迄通達有、参り候所、茶ヲ入ねん頃へ被申、金子入用ノ事迄被申、夫々ニ付〇唐いちこ（からいちご・唐覆盆子）一箱進上仕、市振より外波迄三り、此間砂浜也、壱リ計出、高山波打きわへなり出、其下ヲ通ル、夫より一リおやしらず（親不知）、き、しニ政（勝）ルなん所也、山石岩ニ而高サ弐丁計也、一ノなん所よりおハり迄五丁計有、ぬけ込あな四つ有、一ノなん所ヲ長左衛門ガはなト申、此所ニ而昔市振長左衛門波ニとられ候所ゆへ如此申、一ノあなより三ノあな岩ノ上ニ山木ニ而道作有、上ミチ・下モトヲ女波男波ノ様子ニ而通ル也、四ノあな迄半丁よ有、是を長渡りト申、越時いきも切レ申様子、五ノあな平場也、

【図2】

外波しゆく宿問屋七右衛門殿、御本じん也、よき宿也、海きわとおやしら

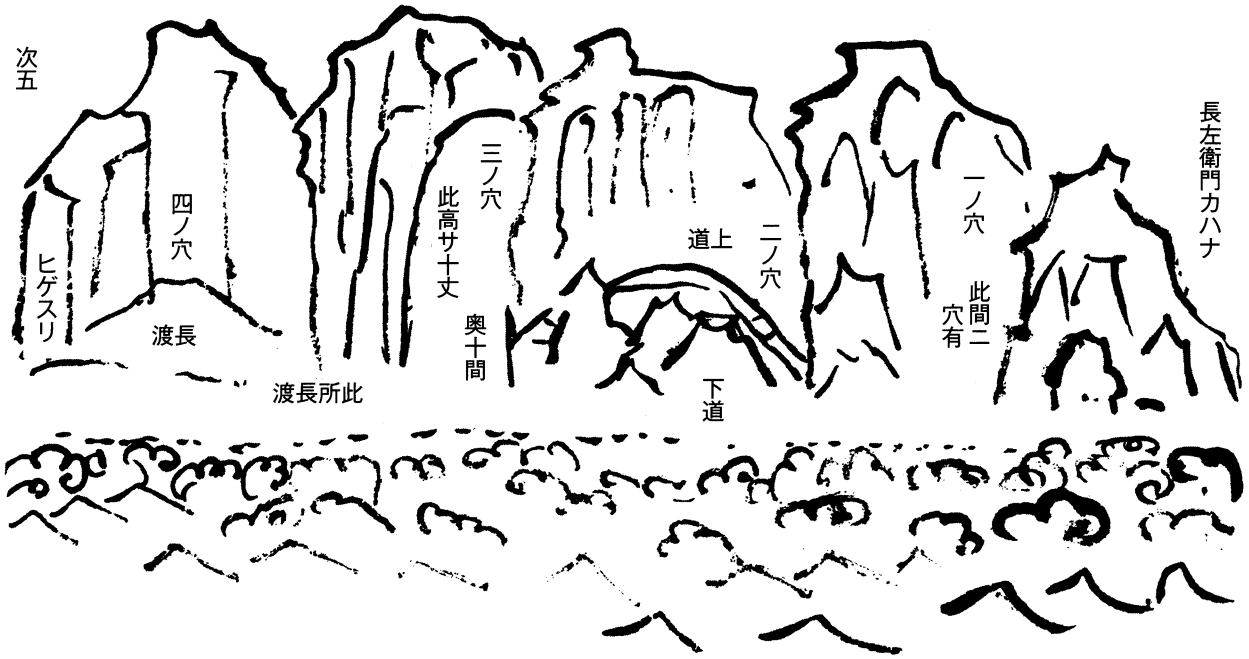


図２　海からの視点で描いた親不知付近

ず山つゝき、少谷間しゆく也、三人宿ちん六百文、御きうせき、○

廿八日

外波より海手ニ中ニ高サ三丈計立岩ニ弐丈計立岩有、五丁計末ニ大岩きひしく波打かゝる、壱り行、駒かへり、石山十丈計より一二三丈、通ノ上へ弐間計おい懸り、下ハミかけ石弐丈壱丈等ノ石ツミ上り、夫より波打きわへくツり懸り、道ハ波より高き所壱丁計也、此間十弐三丁也、其石ノ間ヲ通ル事、此か波高ク下ノ石高サ弐丈計ノ石共ニ波打つき塩（潮）けむり三四丈計上り、さもすさま敷見るニ目もくるゝ計也、其音スサマシき、夫ヲスキ平地乍ら石ノ上ヲ通ル、半道計過、岩山波打きわへつき出、高サ六間計ノ上より瀧ヲチ下ニ三丈計ノ石、弐三十ならひ、其上へ瀧ヲツ、鶴ノ瀧ト申、其次へ茶屋有、壱間屋也、高札有、北国鶴ノ茶やト有、夫より青日（青海）川、かち渡りト申候へとも川越無クてハ渡りかたき所也、○青日の宿　○御きうせき西蓮寺　夫よりかち（鍛冶）屋敷宿一り六丁、夫より弐丁ほと行、高山海へなり出、山ノ下大石共まんまんトシテ波ハ石ニ打付、おふらい通りかたく山ノほて海より十間計上ニおふ来付通ル、夫より少又坂付、石垣ヲつミ候所ニおに（鬼）伏ト申茶屋也、夫より下り一間や有、夫より村ツゝき、すくニおにぶし本村有、○きふ（鬼舞）村、鬼谷山楠田院西性寺宝物色々有、いさい順はい（拝）記ニ有ゆへりやくす、

二十九日

能生宿より出口近に石山ノことく大石ノほてたいらニ仕り、壱丁四方程ニ奥院白山大権現、前堂八間計、前ニ石橋有、南向大き成堂、ごま堂、左ニ阿ミた如来本地堂、下より石たん五計計、石ノ鳥居有、左ニ大石たうろ有、彫付かゝ三度・能生氏子中ト有、海の手かい道より弐百間計海中ニ高サ五丈計、廻り弐百間計大石岩也、其中ばニ弁天堂有、尾崎ノ弁天ト申、少々木草有、其ならびニ壱丈計ニまハり百間計、又其次ニ、其より少キ岩又三つ、其外小岩大小弐百計海中くか（陸）迄有、岩ノ下ふかき事あいノ

ことく波打かゝる、けしきぜつけい也、往来ニ木ノ鳥居、石とふろ弐本有、○夫より名立迄三り半砂道、大なん所也、りやうし浦々所々ニ有、名立ハ三里半手前より山なり出ミゆる○上名立宿、下名立先年大じしんニ而くする々由○名立より有馬川迄弐里、山海へなり出、その山ノ中ニ道有、弐りノ間山小坂十ヶ所計、壱り半計、山上ニ茶屋有、向イニ佐どの嶋かすかにミゆる、東より北ノ方ニ今町出崎、其後ニかすかに又出はり、出雲崎ミへ山下ニ一めん海上ミへ、セつけいノ茶屋也、夫より小坂弐つ過、有馬川也、

三十日

有馬川出口より半道計山坂下り、半道浜、○長浜宿より五知迄小山道、五知懸り十丁計浜、小坂上り村有、壱丁計行、○五知五尊仏宗寺、山門本堂とふヤケ（焼）、きやう蔵計残り、六ヶ年以前やけ、かり家、御仏阿ミた様ト大日様、向イニ祖師聖人三十九才御木そう○江戸講中より御ミずし（厨子）き進、後ニかゝミの池、横杉林之内、御あんじつ（庵室）のあといへり、心屋敷ト申、石とう有、やらい有、御堂後五ヶ年召上御水有、三丁計行、光源寺御たひ姿ノ御像有、□仏□也、□□□□所之よし、三丁計小丸山御あんじつ、いさいしゆ（朱）也、荒池有、松林ノ外梅計也、半丁わき願三大師、□□□、ハ（波）切名号外ニ堂有、○小丸山より五丁計山つゝき高き所春日山けんしん城あと有、夫より高田へ一リ半計、高田町一リ計あまりきれいになし、

五月朔日

高田よりあらい宿平道弐り半、○あらいより二本木宿、是より小山ニ懸り道高なん所、山中へ入登り也、正南むき入て右之方二里計、向ヲニ妙光山ト申高山雪満々たり、なりハふじ山ノことくよき山也、高サ三四里も有ト見へ越後大一ノ高山也、【図3】二本木より関山一リ半、尤高田よりあいノ茶屋々々有、関山ニ三社権現有、坊御印百石なれ共三千石計入、日光持、今日江戸より御附（着）、じう者百人計とも也、

図3　妙高山

五月二日

関山より関川へ三里、此間二タ谷有、大タ切、小タ切トテなん所、板橋有、妙光山なかれ口、

【図4】

関山より壱り計、関川すそはね（刎）橋有、大谷村はね橋ヲ渡ル、是より高山十ヲ計越ル、壱り半よ山下リ、○ぞうぞ（蔵々）村、是より平地、関川ふちあるく、○金又（兼俣）村、山ヲリ口、熊坂村御天料、赤川、小原て是より海道、此間山坂、野尻ノ宿、山上ニ壱り半四方、ひわすノ地トて大キ成いけ有、［　］是島ノ内也、野尻宿、そば名所、柏原一り、此間長坂等有、むれ迄壱り半八丁、

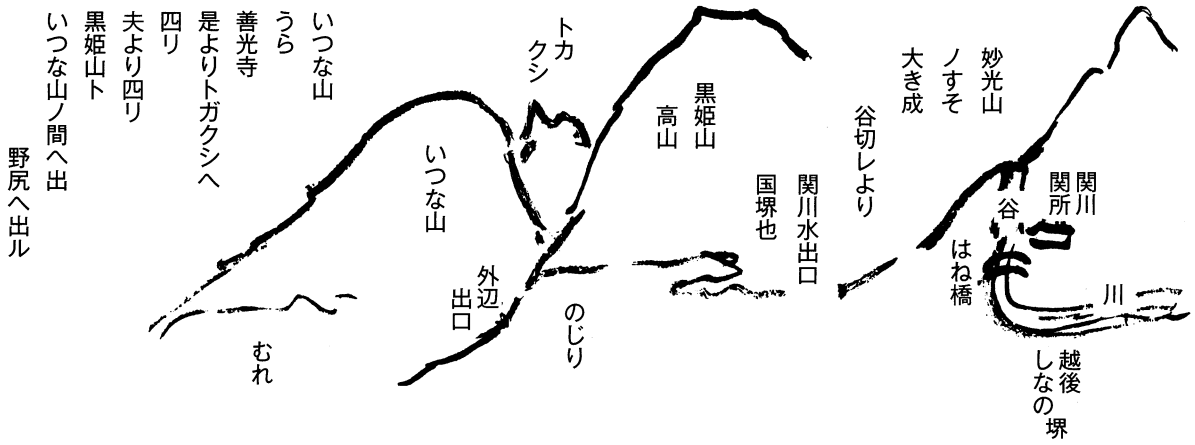


図４　関川から牟礼付近

五月二日　むれ宿かゝ屋六左衛門殿泊り

△金子・はた（幡）等受取

未五月三日

牟礼宿より壱丁計出、とふげ有、夫より岡三十丁計行、右ノ方、平出村ニ石ノセきび（石碑）ニしんらん聖人九字名号ト有、在家也、御名号は家ノ横へ三間四方計リノくず屋ゑん付、少き御堂也、がくニ光明堂ト有、仏前しよく（飾）三つ具足かさり有、高サ八尺計春慶ぬり之ずしノ内ニ又黒ぬり金ニ而いろいろ段有、平之ずし有、其内赤地金らんとちやう（戸帳）あがり、内九字御名号聖人御筆、地ハ藤ニ而織、其上ニ金でい（泥）にて御名号少はけ有、表からハ紺地□□□赤地、廿年以前ニ能州より廻り金沢表具ていよ（伊予）殿ニ而出来由、今ノ藤兵衛殿あつらへらる、尤ゑんき壱枚被下ル、明百文上也、

○平出村より半道計行、小山横まハり十丁計、とふけ有、吉村とふげといふ、其下吉村ト申、在家也、則茶屋有、宜敷茶屋、何而もたべもの有、せん水ニかきつばたさかり也、○此吉村とふゲノ上より見おろし候所、信濃〈シナノ〉一国ノ平場也、廿里よ四方有ト申、丹波島、大河ミゆる、此川下三十リ出行いかたニ而落合、川上廿リ木曽地より出ル大河也、○向イニ高山満々たり、其出崎ニ山ノ尻有、其所とふけ有、鳥打とふげト申、松代道也、松代はさなた伊豆守様城家也、丹波島川ヲ中カ場ニ仕リ弐三リヲ川中島ト申、川ヲヘダテ、ケン信信玄タ、カイノ場所也、此間ニ松原平場有、是ニ信玄チンドリノ所、両大将あら武者ニ而早朝たがひニじんをよスル所、朝ギリニ而見へぬ内、不計ラ両大将行合候が、かの川中島古今ノ一セン也、○満々たる向イ山ノ内、ス坂山高山也、其後浅間山也、見へ不申、夫より一リ行、荒町、夫より一リが間町つゝき商人見セ有、はんじやう也、善光寺入口木戸有、十丁計行、大門入口、

善光寺ノ事

入口石タン有、木ノ（戸）有、其キハニ番所まく打、番人三人計大帳控、リヨ（旅）人ヲ尋、国々郡々ニ而五十坊へ案内仕直ス、加州三国モ十弐郡ニ而宿坊違、金沢ハ又ヘツ也、金沢宿坊善行坊様、但サツマ・ヒゴ・アキ・金沢、木戸より仁王門迄一丁計、大キ成門也、夫より山門、但廿間計有、二王門より山門迄角石ハ、三間ニ弐丁計、両かわ茶屋・小間物屋・種々有、山門より御堂迄百間計、但山門上ニ忠信、次信ハカ有、御堂ハ、十八間、後ロ行三十間ヒハダフキ、金メツキ金具也、かうらん有、入口ニ大花ひん、是ニシンラン松トテ祖師ノ上ケタマう松也、楽道具カサリ有、其外堂中絵馬・金燈籠数多シ、毎や宿坊施主より夫々有トモス、堂天シやうガうテンシヤう（格天井）也、あミはり有、中場迄板ニ而土足荷持ナガラ上ル、夫よりヤライ内ニたゝミ敷ニ仕切、トうリう（逗留）ノ者是へ参詣仕る、御勤朝六つ時御開帳、○昼九つ同行、○夕六つ時頃同行、朝計開帳、其外ヘイ帳、然レトモ国々より開帳有ゆへ、開帳タヘズ、○らんこ（来迎）廿四ホサツ、其内蓮花壱ツアキ有、是ハホンフ往生ヲ待タマう座也、

―堂ノ内、此所ハタ懸り有、（以下七行、堂内正面の配置を示す）

―此所ミスマキ（御簾巻）上也、

此所善光・善祐・ヤヨイノマへ　○前かさりいろいろ　是ハいつもへい帳―

此所如来様

―此所ミスマキ上也、

此所ハタ懸り有

仏前後ニ、○太子、○かうほう大師、○□仏、○弥陀如来、しやか如来

○内シン内より如来ノ下穴三べん廻ル

○かさりいろいろ、金めつき、蓮花くわひんニ両方ニ有、○光明ノ火金たうろ三つニ有、

○そらニ天かい（蓋）有、○とちやう前帳大蓮ノも様○あかり内ニ○しゝたん（須弥壇）之上方けつかう成ミすし、戸、大観進様ひらきゆく、

○らうそく六丁ともるゝ、○ミすしノ内又ミすし有、○前たい金弐丁□□

○次第々々ニ戸帳上ル、○其内小しやうご（鉦鼓）弐丁なり、

○善光寺堂其外キヤう内絵つ（境内絵図）一枚有、○仁王門ノ前、右ノ方

○堂正坊様シンラン聖人曽御とふりうノ内、戸カクシ山へ御参詣之時、風越ト申山道ニ而小笹を御取被遊、六字名号ノなりニ被遊、是ヲ笹字名号ト申、○聖人にく付キノ御は（歯）、宝トうニ入り有、是ニ聖人御歌

いつのまにかみにしもをき一葉おち　身にしみてこそ南無あみた仏

○大観仁様　御天（殿）申計もなきけつかう（結構）　○上ハイハイ堂、

○ゴマ堂、○其後ロうカ百間計行、式台口より御居間けつかう申計りも無き事、此方妻御目ミへ其上御咄シ、有難事、○夫よりベツ天ニ御出御通り開帳、併同善光様御三人、天下イハイ○がく、かう坊大師御筆金字ニ而善光寺ト横字ニ而有、其外ケツカう也、○此度はた地白ノ分弐筋、御仏前両方ニ懸ル、○唐ばたミす横はしらニ懸ル、○御本坊へ十一人法名大イハイニ仕リ納ル○月拝也、○宿坊善行坊へ右十一人法名イハイニ仕ル納ル○月拝也、

○五月五日朝如来前へ御膳上ル、但三宝弐つ、色々かさりもの、御口地等

○五月五日朝参詣仕り、持参之香上ル、則善行坊様取次ニ而香ろう御持出也、

○此方あミだきやう上ル、正信ゲ六首引上ル、○御膳ニ上り候御菓子御ぶく（仏供）等拝領仕ル、

善光寺　イハイニ法名彫ニ仕ルニ付控

御本坊イハイ黒ぬりれんたい付、ハ、壱尺壱寸計、立サ壱尺五寸計、表ニ年号月日、

宿坊善行坊イハイ、右より少チイサク表ニ年号月日、

明和二年四月朔日　　明和三年五月朔日

釈　浄秀　　釈尼順歌
寛政二年八月十八日　　安永八年二月廿四日
釈尼明知　　釈尼明了
天明五年十月廿三日　　天明四年四月晦日
釈尼妙意　　釈尼妙幻
寛政元年閏六月九日　　天明六年正月廿七日
釈尼妙順　　釈　浄幻
寛政十年八月廿一日　　寛政九年正月廿二日
釈尼妙故　　釈　開見
正月廿四日
釈尼妙春　　加州金沢河原町田上屋道助
善光寺　覚
一、金子弐両三歩　御本坊へ月拝料
一、金子弐両三歩　宿坊善行坊へ月拝料
一、金壱両　五重ノトう御コンリうニ付、五重目柱壱本キシン、
一、金子百疋　如来前へ御膳料
一、金弐朱　ハタ四流レ納料
一、金子百疋　大勧進様へ上ル
但、箱入御所落雁そへ
一、金子弐朱　役僧放光院殿へ進上
但、中菓子十五計、并箱入金米糖そへ
一、金子百疋　宿坊善行坊殿へ進上
但、中菓子十五計そへ進
〆七両弐匁
覚
一、金弐匁百廿九文　拾三匁五分　御本坊イハイ代
拾弐匁　宿坊イハイ代
六百廿文　イハイ字彫ニ仕る御料
此方金弐匁百廿九文
一、壱歩弐朱　宿坊善行坊様へ三人未五月三日昼より同五月六日朝迄、三日ノツモリ、一日弐朱アテ
一、六百文　小者壱人　テツチ壱人　ヤトイ女壱人　弐百文宛遣
〆
善光寺より高田まで前ニ書有ゆへ書不申、△善光寺より六日立、七（六）日野尻泊、七日荒井泊、八日荒井より黒井泊、
高田五ケ寺○笠原山本誓寺○浄興寺○中戸山常敬寺○東御坊○井波山瑞泉寺○性宗寺、仏光寺流、国府配所いおりノ御絵開帳仕り御写もらふ、高田より春日新田へ二リ、黒井へ壱リ、○黒井へ泊ル、

（五月九日）

黒井より柿崎四リ七丁、○柿崎　浄善寺　十字御名号開帳、浄福寺九字御名号開帳ヱン記名号写、○扇屋屋敷あと石ヒ有、廻垣角屋敷、門有、かく有、石ヒニ金字ニ而シンラン聖人御旧セキト有、○柿崎村入口ニ川有、三十間計橋也、此川ニ而川越名号被遊ト也、夫より二リ七丁帰り同日片（潟）町宿扇屋ニ泊ル、

五月十日

越後片町より出、今町湊舟渡り△壱人十六文舟ちん、夫より又五知へ出、○御庵シツアト又拝し参り、○御木そう様又御ミトう仕、○御香らうそく上、あミたキう有方上ケ、○堂坊へ明進上仕ル、○肥後ノ坊様御内所病気ゆへ薬四五種進上仕、ゆ進上仕候、夫より昼、有間川ニ泊リ

十一日（および十二日）

有間川より出、大雨、夫より梶屋敷泊り、七つ半、廿里山下ノ内大なん所也、七つ比ニ付、且又聞合候所、梶屋敷より半道末、大和川、かち渡りノ

所、満水、尤七つ前より姫川トマル、夫故十二日昼迄、梶屋敷ニトうリう（逗留）、昼飯被下候所、姫川アキ外波迄五里ノ間、八つ半頃ニ着

十三日（および十四日）

外波より壱り計砂浜出、おやしらず手前より谷切ル間ニ家四間有、夫より壱りよ谷合よりトうケ登り極なん所也、登りはなし、半道計下り、向イニ大山雪満ンゝタリ、則アゲロ山也、山姥ノ住候所ト申、其内大木ノ杉弐本有由、其枝両方より行合、下ハ一向雨もらず、其下ニ上清水有由、此所山姥住家ト申、○アゲロ村十八間計有、作モ仕ル、夫より川谷峯コへ堺川半道計、川上へ出ル、夫より平地出、堺御関所三丁計手前へ出ル、○昼より雨ふり（十三日）泊りニ宿ス、十四日、大雨ニ而舟見へ廻り相元川舟ニ而越ヱ魚津ニ泊ル、

十五日（および十六日）

魚津より富山へ出ル、○十五日、昼宿清水屋権三郎殿へ着ク、ヤスミ、十六日ニ芝居見物、○大坂中芝居、ふたつ蝶々、中入ニかゝミ山、下サジキ一間より毛セん、其外、酒、小ふた、取肴色々、膳等出、干生子等出ル、○宿内所下女等ツレ五人罷越、

（改丁。以下、宿屋および献立の別記）

金沢より泊り付并料理付控

四月廿三日

石動　問屋市郎兵衛殿　○弐百文払

夕飯　にもの　大しいたけ　　朝飯　にもの　こんにやく
　　やきとふふ（豆腐）　　やきとふ
　　竹子　　しみこんにやく
　　汁　な（菜）　　汁　な
　　焼物　一塩鮪　　しめもの　干大根

四月廿四日

小杉　大所寺屋　○百七十文払

夕飯　やきもの　一塩鯛切やき　　朝飯　しめもの　干大根
　　汁　な　　まぜな
　　にもの　セんまい　　にもの　こんにやく
　　竹子　　とふふ
　　やきとふふ　　竹子
　　汁　な

廿五日

滑川　氷見屋又兵衛殿　○弐百文払

夕飯　たいさし身　　朝飯　汁　ふき
　　にもの　生いか　　にもの　やきとふふ
　　汁　あんこ　　竹子　きゝ
　　焼物　大鯛　　ふ多多（九）
　　焼物　鯛

何レも浜より上りかけ生しめ、さし身なと磯ノことし

廿六日

舟見　内嶋屋久右衛門殿　○百七十文払

夕飯　にもの　玉子ふうふう　　朝飯　にもの　焼たうふ
　　向　セんまい　　セんまい
　　やきとふふ　　しいたけ
　　いも　　汁　な

しいたけ　　しみもの　干大根
汁　な

△市振宿（桔梗屋）
○百七十文払
あまりていねい待かねニ唐いちご遣

廿七日

外波　問屋七郎右衛門殿　○弐百文払
夕飯　汁　たいうしを（潮）　朝飯　干大こんしめもの
向　ほら　なんばすミそ　　しる　たらかきミ
にもの　セんまい　　にもの　セんまい
竹子　　やきとふふ
しミこんにやく　　ふき
青な

四月廿八日

能生　問屋源右衛門殿　○弐百文
夕飯　向　湯そうめん　　朝飯　にもの　玉子
刻大根　　くみたふふ
ちそ　　くりたけ（栗茸）
しゆのすミそ　　かれ焼物
にもの　かんひやう　　香のもの　ならつけ瓜
竹子　　ミそつけ瓜
大しいたけ
ふき

汁　な

四月廿九日

有間川　問屋近右衛門殿　○弐百文
夕飯　にもの　大平つミ入　　朝飯　汁　うかし
ふき　　焼物　赤鯛
かれ焼物　　にもの　竹子
汁　な　　ふき
切魚

同三十日

高田　有沢屋六右衛門殿　○百五十文払
夕飯　焼物　平目切魚　　朝飯　ちよく（猪口）干大根
にもの　干大根　　にもの　ふき
油上　　やきたうふ
わらび　　竹子
しる　な
御大名泊りニ付外宿あしし

五月朔日　○弐百文払
関山　村越惣兵衛殿
夕飯　向　長干大根　　朝飯　しるなし
ごますあへ　　にもの竹子計
にもの　竹子　　向しめもの
かんひやう　　にしめもの
ふき　　ミそつけ

せんまい
しいたけ
汁　小な
小皿ニ梅干
糟つけ瓜
ひる九つ半比ニ泊り、かきもち出、此方よりくわし遣ス

五月二日

むれ　かゝ屋六左衛門　○飯料弐百文宛
夕飯　にもの　かまぼこ　朝飯
しミこんにやく
な
汁　小な
皿々　玉子ふうゝゝ（ふわふわ）
但、はた（幡）・金子（善光寺奉納用）等預ヶ置ニ付○三百文茶代、外ニ干くわし遣

五月三日昼より六日朝迄、善行坊（善光寺）泊る

五月六日夕　○弐百文払
野尻　加々屋伊右衛門殿
夕　出し茶土ひんニ出　朝　にもの
いり米重ニ　小な
小ふた　玉子　やきとふふ
梅　かまほこ
やき魚　向　平目切焼物
酒
めし替りそは

五月七日

二本木　茶屋弁道（当）　宿ヲしらす腰懸ル所尋ニ預り、別ニ茶入レ出サレ茶代廿文遣、
五月七日夕　昼八つ半比ニ付ク、茶入レいりくわし出
荒井　近江屋杢左衛門殿　○弐百文
夕飯　汁　わらび　朝飯　汁　小な
向　たいうと鱠　にもの　うトン
にもの　竹子　とふふ
干こんにやく　平目いりつケ
ふき
かまほこ
焼物　たい切身

五月八日夕
黒井　りやうし家へ泊り　キチン（木賃）　○三人而弐百五拾文
壱人四十文米代、夕朝ひる飯ニ三人ニ而壱升六合七十文也
夕　なしる　朝なしる
いわしいり付　香のもの有

五月九日夕　○百五十文宛
片町　扇屋
向さし身　朝　とふふわゝゝ

夕　しるな　　志る
にもの　ふき　　香のもの
わらひ
平め（カ）

五月十日夕
有間川　問屋近右衛門殿　○弐百文宛
夕　向　鯛鱠　　朝
汁　鯛うしを
にもの　ふき
ばへん（はべん＝蒲鉾）
△昼付候ニ付、出し茶、もち遣、
○百文、茶代出、中くわし遣

五月十一夕
かち屋敷　宿弥左衛門殿　○弐百文宛
夕　汁　小な　　朝　干たら
向　たい鱠　　にまめ
にもの　鯛せんば　　にものセんまい、花かつを
△尤昼飯茶ツケニて

五月十二夕
外波　問屋七左衛門殿　落付、かい餅さと（砂糖）、三人ニ〇飯料二朱
夕　しる　な　　朝　切焼物　鯛
向　ふき　　にものセんまい
こくりたひにもの　　山ノいも
切焼物　鯛　　□
△此方よりミやけに、中くわし一筥
善光寺様上りくわし
さとつけ天文（門）冬

五月十三夕
泊り　古江屋久左衛門殿　ニハ家具極上々　○三人七百文
落付　まき・さとまめの粉
夕　にもの　セんまい　　朝　汁わかめ
大かまほこ　　にもの　ふき
向　鯛さし身　　にてんかく
汁　鯛うしを　　向　大鯛切焼物
焼物　大鯛

五月十四夕
魚津　問屋久兵衛殿　○弐百文宛
夕　汁　うすミそ　朝　わかめ汁
たい　　にもの　焼とふふ
向　たい指身　　大甘子
にもの　　せんまい
甘子
□□□

（翻刻終）

〔謝辞〕本史料の翻刻を許可された金沢市立玉川図書館近世史料館、本史料を知るきっかけを頂いた長野市立博物館原田和彦氏に厚く御礼を申し上げます。